
介入者はモブばかり

めだかクロニクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

介入者はモブばかり

【Nコード】

N5342Z

【作者名】

めだかクロニクル

【あらすじ】

俺は気がつくくとダドリーになっていた。そう、全ては終わった。そんな、ギャグ作品です。

作品を完全崩壊させているので注意して下さい。
見切り発車です。

始まりは突然に絶望を与える

真っ暗だった。どこもかしこも暗くて、何も見えなかった。

俺はいつたいたいどこにいる。暗いな、何も見えやしない。

……目覚めよ……目覚めよ……

ああ、俺寝てたんだ。

そう思って、目を覚ますと、体が縮んでいた。

俺は黒の組織を倒す為に、戦うのだ。戦う為に博士に作ってもらった時計方麻酔銃とキック力増強シューズでやつらを踏み潰してくれるわ。

ぐふふな事を考えていると俺の口に何かが流し込まれた。それに現実へと引き戻された。

「ダドちゃん、たくさん食べましょうね」

誰がダドちゃんだよ。そう思いながら、口を開けてドロドロの食物を食べた。どうやら、俺は、赤ん坊になっていたようだ。最初は巨人の島にでも連れてこられたかと思ったが、どうも違っていったようだ。

離乳食のおいしさに舌鼓みを打ちながら、状況を分析してみた。

まず、目の前にいる人たちを俺は知らない。

俺は、見知らぬ二人の人間を見た。どうしてか、せつせと食事を口

に入れてくるが、知った顔ではなかった。むしろ、日本人である俺に、外国の人がなぜ親切なのか分からない。

そして、俺は自分の体を見た。やはり、先ほど確認したとおりの赤ん坊である。しかし、その体は通常の赤ん坊よりも2まわりくらい大きいと思われる。つまり、デ・・ぽっちゃん系である。

ここから、推察するに、どうしてだか、俺はこの人たちの子どもになっってしまったのだろうか。これは、いわゆる憑依というものだろう。

ここで、一つの問題が出てくる。ここがどこなのか。そしてどの世界なのかだ。

ここが現実なのだとしたら、まだ許容範囲だ。しかし、もしも漫画の世界だとすれば、大問題だ。忍者の世界やゴンさんの世界はやめてほしい。とてつもなく、死亡フラグ満載だ。

おそらく、この家の感じからして、現代である事は間違いない。だからといって油断はできない。死神の世界、あるいはめだかの世界などといった、現代の話もある。ここで、この世界のヒントになるものを探そうと思う。俺の戦いはそこから始まるのだ。

その日の夜、家の前に赤ん坊が置かれた。そう、俺に弟ができたのだ。その子を恐れるように現両親が俺を抱きかかえながら、震えていた。なんとか、その子の顔をうかがうと、どこかで見ただった。その子の名前はハリー・ポッターというらしい。そして、全てを理解した。

俺はダーダドリー・ダースリーだったのだ。

始まりは突然に絶望を与える（後書き）

ホグワーツルート消滅。

断じて違つー！

「ハリー、遊ぼう」

「うん」

俺があまりにも、ハリーを凝視している事に小首をかしげたハリーが口を開いた。

「ダド、鼻から血が出てるよ」

「心配するな。愛のなせる奇跡さ」

そう、俺達はとても仲が良いのだ。当たり前的事だが、俺はそこらの餓鬼ではない。前の俺は、高校2年で大学に飛び入学したのだ。日本じゃなければ飛び級して15歳で大学に入学する事ができた。どうして、俺が日本にこだわっていたのか、それは、俺がオタクだったからだ。アメコミもたしかに面白いが、日本独特なオタク文化をこよなく愛していた。

話が飛んだが、そんな俺が親の言いなりになるようなわけがないしこんな可愛いハリーをほっとけるわけがない。そう、俺は腐っている。だが、手を出す気はない。ハリオにはジニーちゃんという将来の豚がいるのだ。俺の弟を取ろうとはやってくれるぜ泥棒猫が。

俺の弟の溺愛振りがこうをそうしたのか現両親もずいぶんハリオに優しくなった。今は、ハリオのめんどろを見るために、一緒の部屋で寝ているが、将来は、ハリオにも部屋が与えられるだろう。

ハリオのめんどうを見る中には、ハリオの魔力の暴走を抑える役も僕にしかできないだろう。どうしてかわからないが、夜中にハリオが悪夢にうなされて魔力を暴走させた時、俺は壁に叩きつけられた。俺が壁側で寝ていたため、逃げ場がなく、何とかハリーに近づき、顔に触れると魔力が弱まった。顔中触っているとどうやら、眉間のしわと、旋毛のあたりを押すと暴走はおさまるようだ。そんなこんなで、ハリオも俺の事が好きになっている。

ハリオは間違いなくホグワーツルトに行くだろう。しかし、俺はおそらくいけない。だってポテンシャルはダドリーだ。無理である。ハリオの成長を見守れないのは嫌だが、メス豚どもに会わないのは嬉しい。会ってしまえば、JKもビツクリの嫌がらせをしまくり、ハリオに嫌われてしまう。それだけは阻止しなければならぬ。

「ダド、どうしたの？いこー」

俺の考え込んだ様子を不安げに見詰めながらハリーが言った。

「ああ、行こうかハリー。俺より早く公園についたら、アメちゃんやるよ」

「僕勝つよ」

結果を言えば、負けました。

最初からハリオに勝たせるつもりだったけど、ちょっと焦らせてやるうと思っただけで走って見たら、ハリオは焦った顔をしてぎゅつと目をつむった。その瞬間、ハリオは姿を消し、何と公園にいたの

だ。姿あらわしかよ。偶然できたんだろっけど、卑怯な力だな。

断じて違う！！（後書き）

断じてBLではありません。

感動の涙必至、ハリオとの再開（前書き）

アメリカドラマのネタバレがある回なので要注意です。

感動の涙必至、ハリオとの再開

2年がたとうとしていた。

え？キンクリ？聞こえない。聞こえない。

大学でのハッピーライフは中間地点を迎えた。

俺の学生生活は主に図書館ですごした。イエールの蔵書量は尋常ではない。この本を全て読みつくすのは、至難の業だろう。無理だといわれれば、やってみたくなくなるのが人間だと思う。日夜挑戦中だ。そんな、本の虫な俺は学校の教授陣に重宝されている。記憶力を生かし、カンファレンスもビックリの早業で、本を探し出し、指定された文章が何ページに載っているか教えるのだ。カンファレンスのババアは、仕事を奪われて俺の事を嫌っている。図書館に行くと、よく後をつけられ、どの本を見ているのか探られているようだが、やつの見ている前では、自分でも読めない言語の本をとるようにしている。それをさも理解しているように頷きながら見るのが俺の日課だ。

教授陣は俺に会うたびに、ダドペディア（自分で名乗った）と呼び、本検索をさせられる。それは、あんたの仕事だろというのと、大抵アイスのクーポン券をくれる。釣られてしまう俺が悪いのだが、これは明らかにJKの痩せるなという修正力を感じる。だいたい、日本でJKなんていったら爆笑だろ。ババアのくせに。でもちょっと本物のJKがローリングしてるところ見たい、むしろ一緒にローリングしたい。そんなことを考えていると頭に思い一撃がきた。

「痛っ、何するんだ、ダン」

「お前がまたエロイ顔してしてたから、また変態な事でも考えているのかと思ってさ」

こいつの名は、ダンという。才能もないくせに将来小説家になりたいという無謀野郎だ。

何かにつけて、俺に絡んでくるウザ男である。こいつは、自分の人生を小説にする自伝かいてるくせに小説だと言い張る中二病を発病していて、人生自体が現実小説より奇なりというのを体現したようだ。簡単に言えば、恋した相手がロイヤルファミリー並みの金持ちで、恋仲で進んでいたら、実はこいつの親父と相手の母親が昔に付き合っていたことが発覚して、すったもんだのすえ、恋愛関係が義理のきょうだいになってしまった。

最初のうちはリア充爆発しろと思っていたのだが、義理のきょうだいという事を聞いて少し同情した。どちらにしても金持ちである事には変わらないがな。ちなみにダンの義理の弟はガチの同性愛らしい。さすがにネタにできないが、写真を見せてもらったときはショタっ子すぎてちょっと引いた。うちのハリオは成長と共にいかつくなっていくというのにな。

「お前の7面相はいつもの事だが、涙まで流すとはどうしたんだ？」
心の嘆きが漏れてしまっていたらしい。

「それで、お前なんのようだよ」

「お前がこの前くれた携帯ゲームを家族がほしがってるんだよ。まだ、あるか？」

「何だたかりかよ。まああるにはあるけど」

「それは良かった。お礼がしたいから、今度家に来いよ」

「いやだよ。お前の家、何か怖いもん」

「家族も会いたがってんだよ」

「上流階級なんかに会いたくないよ」

「美味しいアイスがあるんだけどなー、パティシエ呼んで作らせるって言ってたのにな」

「行きます、行きます。行かさせてください」

「おう、じゃあ、また連絡するな」

そうして、ダンと別れ、俺は自分の部屋に向かった。

部屋に戻ると、俺はいつもの儀式をする。

まず壁にかけられている、ハリオのポスターに一礼する。ちなみにこの部屋に入るやつには、皆にそれをやらせている。

そして、俺はハリオの秘蔵写真集アルバムをめくり一通り見ると合掌をして閉じる。

これが、俺の朝起きてからと家に帰ってきてからそして寝る前の習慣だ。

この行為をダンに変態だといったが、失礼なやつだ。唯のブラコンだ、日本じゃ当たり前だといっておいた。その証拠にいくつかの文献を見せておいた。いわゆる同人誌というやつだ。ダンは、アメリカでは控える、捕まるぞと言われた。司法に俺の愛が止められると思っっているのか、まったく馬鹿なやつだ。

そんな事を思いながら、俺は作業に取り掛かった、俺が今作っているのはたまごゲームを改良した、モンスターゲームだ。このくらの物だつたら、なんなく作れる。趣味程度に作っているのだから、問題はないだろう。未来知識は大いに活用させてもらっている。小説もそのひとつだ。ちよつと罪悪感に駆られるが、俺はハリオのために頑張るのだ。俺はマグルだから、魔法界には関われない。だからこそ、マグルである俺が社会的地位に着くことで、魔法界と人間界の橋渡しをし、ハリオ帝国を築くのだ。ヴォルの野郎はどうせハリオが倒してくれるから問題ない。

原作というのは異分子が関わるからずれるのだ。しかし、俺は、ダドリーだ。関われるはずがない。それに、ハリオは今ホグワーツの一年生だが時々手紙をよこしてくるが、原作に乱れはない。俺に手紙で聞いてきた内容が、ニコラスフラメルって知ってるか聞いてきた。いちよう、大学図書館で探した。それを見つけてレポートを書いて送っておいた。ついでに、ライターと懐中電灯（太陽光にもっとも近いと言われる）を送っておいた。悪魔の畏も真つ青だぜ。

ただ、その後、何となく気になって調べてみたら、魔法界にしかあ

りえない情報が載った本まで見つけてしまった。俺が貴重書の棚を見ていたら、上級魔法薬とかかれた本や最も強力な魔法薬、あなたはマグル関係の仕事を考えていますね？等といった明らかに魔法界の本があったのだ。イエール図書館工。

興味がわいて教授に頼み、イエール図書館の書庫の閲覧許可をもらい調べてみると、深い闇の秘術とかかれた本があった。俺は、それを見なかったことにした。唯一つ、確信したことがある。それは、同じく書庫で見つけた本の中に、マグルの中で働く方法イエール板と書かれている本があった。イエールにも紛れ込んでいるようだ。うん、無視無視、俺には関係ないさ。俺の魔法使いはハリオだけだ。そんなハリオとももうじき再開を果たす。

そう、ハリオが一年生を終えるのだ。俺は今、9と3 / 4に猛烈にドッキドッキなのだ。

ハリオ再開の前日

「ね、ね、寝過ぎしたー」

俺は寝巻きのままで飛び出した。

走りながら歯を磨き、そこらにいた知り合いから水をぶん取ると、うがいし、木に水をやっておいた。

「どけ！貴様ら、明日までにイギリスに行かなくてはいけないんだ」
ダドペディアのお通りだとすると、学生達は素直に道を空けた。子ども相手に喧嘩するやつもないし、何より事典として扱うために

機嫌を損ねさせたくないというのが本音だろう。
道まで全力疾走して、タクシーを拾おうとするのだが、なかなか止まってくれない。道に罵声を浴びせていると、一台の車が目の前に止まった。

「乗れ」

俺は、ハリオに会いたい一心で、その車に乗った。

「どこに向かっているんだ」

「イギリス」

「そうか、わかった。空港に向かえ」

男は、運転手に指示を出すと、こちらに向き直った。

「お前、ダドリーだろ」

「ハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオ」

「そうか、身内に何かあったか」

男は、何か考えた素振りを見せ、言った。

「安心しろ、俺が最速で届けてやるよ」

親切な人にイギリスまで届けてもらった。

なんと、服まで替えさせられていた。いやー！俺の貞操がー！！ハリオだけのものだったのにー！！！！

名前を聞くのを忘れてしまって御礼（文句）もいえないが、心の中で感謝しておこう。

現両親と再会しハグをしてから、キングクロスに向かった。俺は、ついたやいなや真っ先に9番線と10番線のホームに向かった。ここか、そう思い、俺は柱に突っ込んだ。グシャツという大きな音と共に、その場に崩れ落ちた。

「俺の邪魔をしようとは良い度胸じゃねえか」

怒りに満ち溢れた俺は、渾身の力で壁を蹴った。何度も何度も蹴っている。突然人が壁から現れた。蹴りを止めるまもなく思いつき蹴りを放ってしまって、大丈夫か確認するまもなく、壁の中に消えた。しばらくして、恐怖に引きつった顔と怒りの表情で出てきた人が俺をガン見した。

「すみません。入れなかったもので」

「き、気をつけたまえ」

こめかみを引くつかせながら男は言った。男に連れられた少年があ

まりにも可哀想だったので、ハリオに渡す予定だった飴の一部を渡しておいた。

「こ、こんなんもの」

「捨てるの？」

捨てようと、地面に叩きつけようとした少年に俺はすかさず言った。少年はビクリと揺れた。

「美味しいから食べなよ」

少年は震えながら、飴を口に入れた。ハツとしたように顔を上げた。どうやら美味しかったようだ。まあまあツンデレではないか。デコだが。

「少年よ大志を抱け」

少年たちが去っていく背中に向け大声で言うておいた。

「ダド、何してるの？っていうか」

懐かしき美声を聞き振り返るとそこにハリオがいた。

「ハリー会いたかったぜ」

俺はハリオの前ではクールを気取っているのだから体はハリオに抱きつかうとしたが、強靱な意志の力で押さえつけた。すると、ハリオのほうからハグをしてきた。

(やべ、鼻血でそう)

俺は、優しくハリーの背中に手を回した。

「ハリー、そのデブ誰？」

ハリオの後ろから声をかけてきた赤毛の少年が言った。

「誰がデブだ。これはJKの呪だ！魔法使いだったら呪を解け！！
それと俺はぼっちゃり系だ」

引いた顔をする赤毛にハリオがやさしく語りかけた。

「ロン、紹介するよダドだよ」

「ああ、靴下の」

靴下という言葉を聴き俺は反応した。

「ハリー、クリスマスプレゼントすごく嬉しかったよ。ハリーの靴下をくれるなんて、自分の足も気にせず悪かったな」

「ダドには、僕の方があったほうが良いかと思ってね。ダドのプレゼントのカシミアのマフラー、凄く暖かったよ」

後ろからロンが声を上げた。

「そつだ、僕ももらったんだ。ありがとう」

「ハリーがお世話になっているからね」

俺は、ハリオの友達にも送っておいたのだ。せいぜいハリオ帝国の礎となるがいい。

「ダド、でもやりすぎだよ。グリフィンドール生全員にプレゼント贈るなんて。マクゴナガル先生や校長先生にも贈ったんだって、それにスネイプにも」

「御世話になつてるんだから当たり前さ。スネイプ先生にもお世話になつたんだろう」

「ダド、何か知ってるの?」

「ハリーが手紙で教えてくれたろ。厳しくあたるって事は、それだけ目をかけられているということだろう?」

「そういうことか」

もちろん、俺は、全てを知っているんで、スネイプにもプレゼントを贈っておいた。ついでに、クイレルにもありとあらゆる魔除けを送っておいた。ふふふ。

「ダド、また7面相してるよ」

「ああ、すまなかったな。あれ、ロン君はどこかな」

「もう帰っちゃったよ」

「そうか、では俺達も帰ろうか」

そう言って、家に帰っていった。

感動の涙必至、ハリオとの再開（後書き）

ダンとか分かる人いるんですかね。

眠いーよ。深夜のテンションがハンパないです。

ウィキペディアがこの時代には存在しないと云つツツコミは無しの方向でお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342z/>

介入者はモブばかり

2011年12月18日03時50分発行